

万葉びとの「見る」こと

北 島 徹

古代の日本人の「見る」という行為が、現代人のそれとは違ったものであったということについては、早く土橋寛氏も述べられていることである。

「見る」ことは、古代においては単に感覚的な行為ではなく、人の生命力に重大な関係のある行為であった。外界の呪力が「見る」ことを通して人体に感染する、あるいは体内に入ってくる¹。そのような行為であったので、古代においては、花や青葉、立ち登る雲や煙を見ることによって、それに内在すると信じられた霊力を感染させて自らの力をつける、といった「見る」ことのタマフリ²という呪術的行為が行われていた、と説かれている。

ところで「花見」や「国見」といった「見る」ことのタマフリは、当然タマフリを行おうとして何かの呪物を見るわけであって、そこでの「見る」行為は意識的にされたものと考えられる。本稿はそういった意識的な「見る」行為から離れて、無意識的な「見る」ことについて考えてみようというものである。土橋氏が「見る」ことのタマフリ³につい

て、

自然物を見る行為の中に実感される快感が、予祝的願望と結合することによって生じたもの³。

と述べられているが、私はこの「予祝的願望と結合」する前の「実感される」ものの方を探ろうとしているわけである。万葉びとはどんな景物を目にしてどのように心動かしたのか。そのことの追求が本稿の目的である。

二

さて万葉びとの無意識的な「見る」ことの考察にあたって、ここでは助動詞「けり」に着目することによって行うことにした。この「けり」という助動詞には「それまで気付かなかったことに今気付いたという驚きを表す」との意味がある。したがってこの「けり」の用いられている歌の中から「見る」ことにかかわるものを拾い上げてゆけば、万葉びとがどのようなものを驚きをもって見たのか明らかにされるであろう。そこでまず助動詞「けり」の意味を確認しておくことから始めることにする。『時代別国語大辞典・上代篇』には次のように記されている。

① 過去の事実、継続して存在した事実、または現在の事実、その存在や意義や理由などが、いまにおいてはつきり認識されるにいたった、という形で述べるのに用いる。

② ①のような意味からして、いまそのことに気づいたという詠嘆・驚嘆の気持を含めて述べるのに用いられることも多い。

「けり」についてはほかのものでも説かれているが、大体右のようにまとめられるようである。しかしここでは「けり」を少し違った観点でとらえ、万葉びとがどのような場合に「けり」を用いたのかを調査することによって、「けり」の持つ意味を再確認しておきたい。

ところで「ことば」には、「それを発する者」と「それを受ける者」と、そしてその双方を乗せている「場」というものが必ずかかわっているものである。「ことば」の持つ意味は文脈の中でもとらえられるものであろうが、さらにその「ことば」の用いられている「場」の中でとらえてゆく必要もあろう。今扱おうとしている「けり」についていうならば、先の辞書にあげられた意味は文脈の中でとらえられたものである、これから見てゆこうとするものは「場」の中でとらえられる意味、ということになる。

さて万葉集には周知のように部立が設けられている。これは歌それぞれの作歌事情に基いて分類されたものといつてよからうが、その作歌事情も「場」ととらえることができる。三大部立について考えてみると、「挽歌」は人の死を悼んだ歌であるが、これは一人の者がある人物の死を悲しんだという個人的な「場」で作られたものから、殯宮儀礼歌のように公的な「場」で作られたものまでである。「相聞」は主に恋人や夫婦、友人といった関係の、私的な「場」で作られたものといえよう。「雑歌」はそれ以外の様々な「場」で作られたものと考えられる。

ところで「けり」表現をとる歌は、次の表に示したようにこれらの部
立すべてにわたって存在している。

挽歌	二三九	二一	雑歌	二、一二二	一九八	部立全歌数	部立全歌数	けり使用歌数	けり使用歌数
相聞	一、九一〇	一〇一	防人歌	九三	一六二	部立全歌数	部立全歌数	けり使用歌数	けり使用歌数
			臂喻歌	一六一	四				

したがって「けり」がどのような「場」で用いられているのかは、各部立別に子細に見てゆく必要がある。ここでは歌の詠まれた「場」が、題詞や左注によって比較的是っきりしている「雑歌」と「挽歌」とに限って調べることにした。

まず歌数の少い「挽歌」の方を先に見ることにする。次に示したのは「けり」表現をとる歌を有する歌群の題詞・左注である。△▽に示した番号は「けり」表現をとる歌のものである。

- (1) 柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌
(或本) 短歌 ∧ 2・二一六▽
- (2) 讚岐狹岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌
反歌 ∧ 2・二二一▽
- (3) 神龜五年戊辰大宰帥大伴卿思恋故人歌 ∧ 3・四三九▽
- (4) 還入故鄉家即作歌(大伴旅人) ∧ 3・四五二、四五二▽
- (5) 天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌 ∧ 3・四五五▽
- (6) 右、資人余明軍不勝犬馬之慕心中感緒作歌
十一年己卯夏六月大伴宿祢家持悲傷亡妾作歌
又家持見砌上瞿麦花作歌 ∧ 3・四六四▽

悲緒未_レ息更作歌 ∧3・四七〇▽

(7) 詠_二勝鹿真間娘子_一歌 ∧9・一八〇七▽

(8) 見_二菟原處女墓_一歌 ∧9・一八〇九▽

(9) 題詞ナシ ∧13・三三三〇▽

(10) 到_二壹岐嶋_一雪連宅満忽遇_二鬼病_一死去之時作歌 ∧15・三六九五▽

右、六鯖作挽歌

(11) 追_二同處女墓_一歌 ∧19・四二二一▽

右五月六日依_レ與大伴宿祢家持作之

(12) 挽歌 ∧19・四二二四▽

右大伴宿祢家持弔_二聲南右大臣家藤原二郎之喪_一慈母_二患_上也 五月

廿七日

(13) (日並) 皇子尊宮舍人等慟傷作歌 ∧2・一八一▽

(14) 弓削皇子薨時置始東人作歌

又短歌 ∧2・二〇六▽

(15) 靈龜元年歲次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌

或本歌曰 ∧2・二三四▽

(16) 悲_二傷膳部王_一歌 ∧3・四四二▽

右一首作者未詳

(17) 十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿祢家持作歌

∧3・四七六▽

右、二月三日作歌

∧3・四七八、四七九▽

右、三月廿四日作歌

以上を見てまず気付くことは、私的なものが多いということである。

(1)から(12)までは、(9)の卷十三のものが題詞がなく不明であるが、他はすべて私的な「場」で詠まれたと考えられるものである。残る(13)から(17)までは皇族の薨去を悼む歌であるが、これらも公的な席で詠まれたもの乃至は公的な歌ではないといえるようである。

まず(13)の日並皇子の宮の舍人の詠んだ歌であるが、この歌(一八一番)を含む一連の舍人等の歌の作られた「場」については、様々な論議のあるところである⁵⁾。この歌群の直前に

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

と題する長歌一首反歌二首、或本歌(短歌)一首が載せられている。この題詞が舍人等の歌にも直接かわってゆくことすれば、舍人等の歌は公的な殯宮儀礼の席で詠まれたことになる。しかしそれにしては今問題にしている一八一番の歌を含め、舍人等の歌は余りに私的な響きをもっているのである。吉井巖氏が「舍人の嘆き」と題する論考の中で、この舍人等の歌は「皇子との密接な人間的結合」の中から生まれてきたものであって、前の人麻呂の公的な歌とは違ったものであるということを述べられているが、私も同様の感を抱くのである。たとえこれらが殯宮儀礼の席で発表されたとしても、作歌時点ではきわめて私的な思いでもって歌が作られたと考えてよいのではなからうか。

次の(14)の置始東人の詠んだ歌は、「又短歌一首」とあるもので、儀礼の席とは別の「場」で詠んだものと考えられる。同様にその次の(15)の「志貴皇子挽歌」も「けり」表現をとっている歌は「或本」の歌であり、やはり別の時の作と考えられる。これら二首は公の席とは別の私的

な「場」で詠まれたものといつてよからう。

続く⑩の「膳部王挽歌」であるが、この歌は作者も分つておらず、しかもこの膳部王は、例の長屋王の変で父の王に続いて自殺に追いやられている人物であるので、当然公的な「場」で詠まれたものとは考えられないのである。

最後の⑪の家持が詠んだ「安積皇子挽歌」については作歌の場所がはっきりしておらず、これまた様々な論議を呼んでいるところのものである。しかし私は神堀忍氏の説に従って、四七六番の歌は聖武天皇の難波行幸に随行していた家持のもとに皇子の葬時の詳細が伝えられた時に詠んだもの、又四七八、四七九番の歌は難波から奈良へ戻った家持が活道の岡に立つて詠んだものと考えている。やはりこれらの歌も公的な「場」で詠まれたものではないといえるのである。

以上のように「けり」表現をとる皇族の薨去を悼む「挽歌」は、私的な「場」で詠んだもの、又は個人的な感懷を述べた歌と考えられるのである。一方「けり」表現をとる「挽歌」は先にあげたもので全てであるので、題詞に「殯宮」の文字の見える最も公的な「殯宮挽歌」（集中十五首）には一度も「けり」が用いられていないことになる。さらに注目すれば、「けり」表現が公的な「場」にはふさわしくない表現であったとも考えられるのである。

次に「けり」表現のとられている「雑歌」についてその「場」を見てゆかねばならないが、こちらは歌数が多いので、ここでは逆に「けり」表現の見られない「雑歌」について見てゆくことにする。「雑歌」の中で「けり」表現のとられていない歌を求めると、「応詔歌」「肆宴歌」

「讃国歌」などが浮び上ってくる。これらは全て公的な「場」で詠まれたものばかりである。「応詔歌」は晴の場で天皇に召されて詠んだものであるが、題詞によって「応詔歌」と分るものは集中三十首を数えることができる。その内「未_レ逕_三奏上_二歌」であった旅人の吉野行幸時の作一首を除くと、他の作には一度も「けり」は用いられていない。この旅人の「吉野讃歌」について詳しくは後述するが、この歌は奏上されていないのであるから、ともかく公的な「場」には出されていないわけである。したがって詔に応えるという「場」には、やはり「けり」は一度も姿を見せないということになるのである。「肆宴歌」は集中十二首、「讃国歌」は十三首あるが、これらにも「けり」は一度も用いられていないのである。

このほか「入唐使に贈る歌」なども注目すべきであろう。これなどもその性格からいって公的な「場」で詠まれたものと考えられるが、憶良による「好去好来歌」（5・八九四）に「けり」が用いられているだけで、他の十一首には一度も用いられていない。

以上のように、「挽歌」においても「雑歌」においても、公的な「場」での歌に「けり」が用いられていないことは、「けり」が公的な「場」にはふさわしくない表現であったことを示しているといえるのではないであろうか。とすると、逆に「けり」はきわめて私的な「場」で用いられる表現であったとも考えられるのである。

ではなぜ「けり」が公的な「場」にはふさわしくなく、私的な「場」では用いられる表現であったのであろうか。私はその理由として、「けり」が非常に個人的な心情を表現するものであったからであらう、と考

えている。そう考えるのは次のような歌があることによるのである。

敢布_ニ私懷_ニ歌

天離る鄙に五年住まひつつ都の手ぶり忘れにけり (5・八八〇)

陳_ニ私拙懷_ニ一首

—— 浜に出でて 海原見れば 白波の 八重折るが上に 海人小舟 はららに浮きて 大御食に 仕へ奉ると をちこちに いざり釣りけり—— (20・四三二六〇)

これらは、題詞に「私」の文字が記されてあることによって個人的な思いを歌にしたことが知られるものである。集中「私」の文字を題詞にもつものはこの二つだけであるが、その二例ともに「けり」が用いられているのである。このことを見ても、「けり」がきわめて個人的な思いを表現するものであったと考えられるのである。

実際に「けり」表現をとる歌を少し見ることにしよう。

否と言へど強ふる志斐_レのが強ひ語りこのころ聞かずて朕恋ひにけり

(3・二二六)

黙居りて賢しらするは酒飲みて酔ひ泣きするになほ及かずけり

(3・三五〇)

ぬばたまの黒髪変はり白けても痛き恋にはあふ時ありけり (4・

五七三)

もみち葉の散らふ山辺ゆ漕ぐ舟のにはひにめでて出でて来にけり

(15・三七〇四)

年のはに梅は咲けどもうつせみの世の人我し春なかりけり (10・

一八五七)

見まく欲り我が待ち恋ひし秋萩は枝もしみに花咲きにけり (10

・二二二四)

おろかにそ我は思ひし乎敷_セの浦の荒磯の巡り見れど飽かずけり

(18・四〇四九)

このように、「強ひ語り」を聞いたくなったというのも、酒を飲まぬより飲んで泣く方がよかったと思うのも、歳をとってから恋に苦しむことがあったのだと知ること、船の色に魅せられて出てきてしまったというのも、全て個人的な思いばかりである。「年のはに」の歌には「我し」、「見まく欲り」の歌には「我が待ち恋ひし」、「おろかにそ」の歌には「我は思ひし」とあることを見ても、これらの歌がいかに個人的な感懐を詠みあげたものであるかが知られるのである。

このように見えてくると、やはり「けり」は非常に個人的な心情を表現するものであったと考えてよいであろう。であるからこそ公的な「場」にはふさわしくない表現であったであろう。

さて、以上助動詞「けり」について考えてきたわけであるが、ここで「けり」の意味をまとめておくことにする。

助動詞「けり」は、それまで気付かなかったことに今気付いたという驚嘆を表すが、その驚嘆は非常に個人的なものである。

このように「けり」のもつ意味を再確認した上で、以下「けり」表現をとる歌によって万葉びとの「見る」ことについて考えてゆくことにする。意外な事実の発見の驚きが、作者にどのような感情を抱かせたのかといったことは、「けり」表現をとる歌を見ることによってはじめて明らかにされるであろう。

「けり」のもつ意味の一つの重要な点は「驚き」にあるといえるであろうが、「驚き」は必ずある刺激によって起こるものである。ここでは「見る」ことに限って考えるわけであるから、ある事物をふと目にするものが刺激であり、そのことによって驚きが生じることになる。そしてその驚きは必ず喜びや悲しみといった快・不快の感情につながってゆくものである。そこで、快の感情を引き起こす刺激となる「見る」ことの対象はどんなものであるのか、又不快の感情を引き起こす刺激となる「見る」ことの対象はどんなものであるのか、といった観点で「けり」表現をとる歌を見てゆくことから始めることにする。

A 自然の生命の躍動現象の発見が快の感情を引き起こすもの
巻八に次のような歌がある。

志貴皇子懽御歌一首

石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも (一

四一八)

ふと藤を目にしたことによって春になっていたことを驚きをもって知ったというものである。その驚きが快の感情を引き起こしていることは、題詞に「懽^{よろこび}」と記されていることで明らかである。この喜びがどのような喜びであったのかについては従来様々に説かれているところであるが、今はそのことはさておき、快の感情を引き起こす刺激となった「見る」ことの対象物に注目したい。ここで志貴皇子が発見したのは春の景

物である萌え出した藤である。そんな藤を見た時の実感(快感)が歌われているわけであるので、これこそ前述した土橋氏のいわれる「見る」とのタマフリ」に結びついてゆく「実感の快感」であるといつてよいであろう。同様のものとして次のようなものをあげることができる。

春雑歌 詠霞

昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり (10・一八四三)

春雑歌 詠柳

霜枯れの冬の柳は見る人の縵^{あづら}にすべく萌えにけるかも (10・一八四六)

浅緑染めかけたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも (10・一八四七)

山のまに雪は降りつつしかすがにこの川楊は萌えにけるかも (10・一八四八)

山のまの雪は消ざるをみなぎらふ川のそひには萌えにけるかも (10・一八四九)

春雑歌 詠花

能登川の水底さへに照るまでに三笠の山は咲きにけるかも (10・一八六一)

春雨に争ひかねて我がやどの桜の花は咲きそめにけり (10・一八六九)

属三目山斎二作歌

鴛鴦^{せし}の住む君がこの山斎^{しま}今日見ればあしびの花も咲きにけるかも

(20・四五一一)

これらの歌の作者達は、霞や萌え出した柳、咲き始めた桜やあしびなどの花といった春の景物を発見した驚き、実感を歌いあげているが、どの歌も作者の感じている喜び、心地よさが素直に伝わってくるものばかりである。ここにagaつて「見る」ことの対象物は、全て土橋氏のいわれる「見ることのタマフリ」において見られる、呪物である。¹⁰ただこれらの歌における「見る」ことが「見ることのタマフリ」と違っている点は、これらの景物を見ようとして見たのではないということである。

「見ることのタマフリ」は、タマフリのために意識的に何かを見ようとする。しかしこれらの歌は「けり」が用いられていることによってそれまで気付かなかったことに今気付いたということが明らかであるので、意識して見たのではないのである。ともあれこれらの歌は、自然の生命の躍動する様を素直に心地よいものと感じているということで、「見ることのタマフリ」の前の段階のもの、予祝的願望と結びつく前の段階の「見る」ことといつてよいであろう。

次にあげた歌などは対象物が春の景物ではないが、同じような意味で快の感情を引き起こすことになったものだといってよいであろう。

我が衣色どり染めむうまさけ三室の山はもみちしにけり (7・一)

(〇九四)

紅葉が呪物であるのかは別として、ここでは衣に染めようと歌っているのであるから、紅葉の美しさを愛でていることは明らかであり、心地よく感じていたと考えられる。大体において紅葉は快の感情を引き起こす景物であったようである。

雨隠り心いぶせみ出で見れば春日の山は色付きにけり (8・一五)

六八)

物思ふと隠らひ居りて今日見れば春日の山は色付きにけり (10・

二一九九)

右の二首など、紅葉の発見によって心が晴れやかになったことを読みとることができるのである。紅葉は木の葉の枯れゆく時の、いわば生命の衰退現象である。しかし緑の木の葉が色鮮かな赤や黄に変色することを、万葉びとは少くとも衰退現象とはとらなかったのではないであろうか。

紅葉とは別に、次のようなものもあげておくべきであろう。

皆人の恋ふるみ吉野今日見ればうべも恋ひけり山川清み (7・一

一三二)

この歌は山川の清らかな様を発見して詠んだものであるが、「恋しく思った」といっていることによって快の感情をもったものと考えられる。山川の清らかさを生き生きしたものとしたのであろう。

以上の春の景物や色鮮かな紅葉、清らかな山川といったものは、それを「見る」万葉びとに心地よい感情を引き起こさせたと思われる。これは現代人も変らぬ実感だといってよいであろう。

B 自然の生命の衰退現象の発見が不快の感情を引き起こすもの

巻十一の「寄物陳思」に収められた「相聞」の歌に、次のようなものがある。

我が背子に我が恋ひ居れば我がやどの草さへ思ひうらぶれにけり

(二四六五)

この歌では、恋の思いに沈んでいた時にしおれている草を発見したということが詠まれている。したがって、しおれている草を発見したことによって初めて不快の感情をもったというものではない。しかし、しおれた草を発見したことによって、恋人のことを思っしょげていた気持ちがよいよひどくなっているように読みとれるのである。作者は草がしおれているのを発見して驚いているのであるが、その驚きは不快の感情へと結びついているのである。

ここで見られているものは、先のAのものとは全く逆の性質をもった、生命力の衰退現象である。こういった、あるものの衰えを発見した驚きが不快の感情を引き起こしてゆく、といった例として次のような歌をあげることができる。

悲寧楽故郷^ニ作歌一首并短歌

—— 天地の 寄りあひの極み 万代に 栄え行かむと 思へりし
大宮すらを 頼めりし 奈良の都を 新た世の 事にしあれば
大君の 引きのまにまに 春花の うつろひ変はり 群鳥の 朝立
ち行けば さす竹の 大宮人の 踏み平し 通ひし道は 馬も行か
ず 人も行かねば 荒れにけるかも (6・一〇四七)

反歌

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり (一〇四八)

この歌には題詞にはっきりと「悲」とあるので、作者が不快の感情をもったことは明らかである。長歌の結句「荒れにけるかも」は、次の反歌によってそれが具体的には「道の芝草」が生い茂っている状態であるこ

とが分る。草が生い茂るということ自体は、草の生命力の発動現象であるといえよう。しかしこの歌の作者はそれを「荒れ」た状態と見ているわけであるので、草の生命力とは別に、道の生命力とでもいうべきものが衰えていることを見ているのである。そういった衰退現象を目にして不快の感情である悲しみを抱いているわけである。

これ以外に、題詞によって悲しみを歌ったものであることが知られる例として、次の二首などがある。

皇子尊宮舎人等慟傷作歌

み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも (2・一八一)

春日悲^ニ傷三香原荒墟^ニ作歌

三香原久邇の都は荒れにけり大宮人の移ろひぬれば (6・一〇六〇)

これらも先の「悲寧楽故郷作歌」と同じく、生命の衰退現象である荒れた状態を目にして悲しみを抱いたことを歌っているのである。

このほか、題詞には悲しみを歌ったものであるとは記されていないものの、同様にあるものの衰退現象を発見して不快の感情をもったと思われるものとして、次のようなものをあげることができる。

○土地の荒れた様を詠んだもの

三笠山野辺ゆ行く道こきだくも荒れにけるかも久にあらなくに

(2・二三四)

ひさかたの天の探女^{さぐめ}が石舟の泊てし高津はあせにけるかも (3・

二九二)

(右のものの以外に、3・三〇七、四七九、10・一八九九、20・四五〇六も同じく土地などの荒れた状態を歌ったものであるが、紙数の都合上歌は省略する。)

○落花を詠んだもの

妻もあらば摘みて食べまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや

(2・二二二)

さ雄鹿の胸別けにかも秋萩の散り過ぎにける盛りかも去ぬる (8)

・一五九九

(右のほか、3・四七八、9・一七四七、10・一九六九、一二二七、19・四一九三などがある。)

○落葉を詠んだもの

天雲のたゆたひ来れば九月の黄葉の山もうつろひにけり (15・三

七二六)

○朽ちた様を詠んだもの

君が行き日長くなりぬ奈良路なる山齋の木立も神さびにけり (5

・八六七)

足代へ行く小為手の山の真木の葉も久しく見ねば苔生しにけり

(7・二二四)

(右のほか、3・二五九、11・二六三〇がある。)

さて、こうしてA、Bと見てくると、万葉びとは生き生きしたものを発見した時にはうれしく思い、逆に衰えゆくものを発見した時には悲しく思う、といった感情を抱いていたことがわかる。このことは、現代人の我々が一般に抱く感情に通じるものでもあるので、いわば当然のこと

であるかもしれない。ところが、さらに「けり」表現をとる歌を追ってゆくと、今のA、Bのものは全く逆のものが出てくるのである。以下それを次のCにまとめて述べることにする。

C A・Bの交錯したもの

到_ニ対嶋浅茅蒲_一 舶泊之時不_レ得_ニ順風_一 経停五箇日於_ニ是_一 瞻_ニ望物_一
華_ニ各陳_ニ慟心_一 作歌

百舟の泊つる対馬の浅茅山しぐれの雨にもみたひにけり (15・三六九七)

右の歌は遣新羅使の一人が詠んだものである。この歌の題詞に「慟心」という文字が見えている。これは「悲しみの心」であるので、この歌の作者は不快の感情を抱いていることが分る。ところがその不快の感情は、紅葉の発見によって引き起こされているのである。このことは、先に紅葉の美しさの発見が快の感情を引き起こす例としてAにあげたものからいうと、理屈にあわないことになるのである。

又先のBにあげたものから見て理屈にあわないものとして、次のような歌もある。

夕さらば君に逢はむと思へこそ日の暮るらくも嬉しかりけれ (12・二九二二)

この場合、あたりが暗くなってきたことを目にしながらうれしいと歌っている。日暮れが生命力の衰退現象であるといえるかどうかは問題のあるところであろうが、この作者個人は「日の暮るらくも」と歌っているわけであるので、日暮れイコール無条件に喜ばしいもの、ではなかったといえるようである。

このように喜びとはならないようなものを発見しながら快の感情をもったり、逆に喜ばしいものを発見しているのに不快の感情をもったりしていることを詠んだこれら二首は、先のA・Bの理屈にあわないのである。これは一体どうしてなのであろうか。私はここに、「見えるところのもの」の背後の「人の影」の存在がかわつていてと考えているのである。

このことを説明するのによい例として、次の家持の歌をあげることができる。

十一年己卯夏六月大伴宿祢家持悲_二傷亡妾_一作歌

又家持見_二砌上瞿麦花_一作歌一首

秋さらば見つしのへと妹が植_多しやどのなでしこ咲きにけるかも

(3・四六四)

この歌は、ことば通りに読みとると、

秋になつたら何度も見ては愛で楽しんで下さい。¹² といつてあの娘が

我が家の庭に植えた撫子の花が今見ると咲いていた

という意味になろう。そこには花の咲いたことに對する驚きが読みとれるのである。普通花の咲いたことを発見した時の驚きは人に快の感情を抱かせるわけであるので、この歌も題詞から切り離してみると喜びの歌として充分通用するものである。ところが題詞によると歌の中の「妹」が既にこの世にない人物であり、家持はその「妹」の死に心痛めているのである。したがつてこの歌を作った時の家持の感情は不快のものであると考えられる。花の咲くのを発見しながら、その時の驚きは悲しみの感情となつて出てきているのである。それは何によるのか、家持が愛

する女性を失つた悲しみに沈んでいた為に何を見ても心は晴れなかつたのだ、とも考えられる。しかしもう一つ、ここで家持の発見した花が家持個人にとつて単なる花ではなかつたことに最大の理由があると思われる。この花は「妹」が植えた花である。家持にとっては家にある他のどんな花とも違ふ、特別の花であつたのである。花を見るとすぐに「妹」を思い出してしまふ、といった花なのである。

右の歌のすぐ後に、次の長歌が載せられている。

又家持作歌

我がやどに 花そ咲きたる そを見れど 心も行かず はしきやし
妹がありせば 水鴨なす 二人並び居 手折りても 見せましも
のを うつせみの 借れる身なれば 露霜の 消ぬるがごとく あ
しひきの 山路をさして 入り日なす 隠りにしかば そ思ふに
胸こそ痛き 言ひも得ず 名付けも知らず 跡もなき 世間なれ
ば せむすべもなし (3・四六六)

この歌も家持が先の亡き「妹」のことを悲しんで詠んだものである。この長歌の初めの部分に出てくる花はおそらく撫子であろうが、その花に對して家持がどのような思いを抱いていたのかが詠まれている。すなわち、妹が生きていたならそれを手折つて見せようと思つていたことが知られるのである。そのような思い入れがこの花にあつたので、花を見ても「心も行かず」、心晴れなかつたと考えるべきであらう。短歌の方にもどると、妹が植えた撫子、咲いたら妹にも見せようと思つていた撫子の花がふと見ると咲いていた、その時の驚きは当然今は亡き「妹」のことを思い出させ、悲しみがわき上つてきたのだということになるであらう

う。これら家持の歌が以上のようなことを物語っていることによって、花が咲くという喜ばしいものを目にしながら不快の感情をもつ、というようなことも理解できるのである。

以上のことをふまえて先の「夕さらば」の歌を考えてみると、よく理解できる。「夕さらば」は、日暮れが単なる日暮れでないことが歌の中で説明されている。すなわち、この時の日暮れはいとしい君と逢える日暮れなのである。したがって目に見えるところは次第に暗くなっていくという情景ではあっても、その背後にいとしい君の姿が浮び上ってくるために喜ばしい気持になったということである。

「百舟」の歌はどうであろうか。私はここに歌われている紅葉にも、その背後に人の影を感じるのである。この歌と同じ頃、遣新羅使の別の一人が歌った歌に、次のようなものがある。

竹敷の黄葉を見れば我妹子が待たむと言ひし時そ来にける (15・

三七〇一)

この歌では、紅葉を見たことによって妹が待っているといった時、すなわち秋になったことに気が付いたということが詠まれている。この時の一行が秋に帰京する予定であったことは、出発の際の歌に「秋さらば相見むものを」(15・三五八一)と詠まれていることによっても明らかである。したがって「竹敷の」の歌は、紅葉が「妹」と逢える時を思い出させるものであったことがわかり、この歌も悲しみを詠んだものと解せるのである。

こうしてみると、「百舟」の歌についても、作者にとって紅葉が家で待っている人物を思い出させるものであったのではないか、と考えられ

るのである。私は、この歌の作者が旅立ちの際に家の者と「秋には一緒に紅葉を見よう」と約束していたのではなかったかと考えているが、そんな特別な紅葉であったからこそ、紅葉を発見した驚きが不快の感情である悲しみをわき上らせたのではないであろうか。「けり」が、きわめて個人的な心情を表す時に用いられる助動詞である、ということは前述した。その「けり」が「百舟の」の歌にも使われているのである。したがってこの歌に詠まれていることが同様に個人的な思いであるということになると、この紅葉にもきわめて個人的な私的な意味があったということになる。その個人的な意味とは、普通の人にとっての紅葉とは違う、背後に人の影を髣髴させるものであったということである。歌の内容容からだけでは紅葉が作者にとって特別な意味をもつものであったとは分らないのであるが、助動詞「けり」を用いていることによってこのように考えられるのである。

ある景物が、ある人物の形見や縁であるような場合、それを見た時にその人物を思い出すことになるということは、当然といえば当然のことであるが、万葉集において、歌や題詞に縁としての説明がない場合、それを実証することは困難なことである。しかしこのきわめて個人的な心情を表現する「けり」が使われているということを一つの手掛りとすれば、ある景物が作者個人にとって特別な意味をもつものであったと考えられるのではないであろうか。

以上、喜ばしい現象を見ながら悲しんだり、逆に衰えゆくものを見ながら喜んだりするものについて見てきた。これは先のA・Bと違い、万葉びとの目が「見えるところのもの」から、その背後の「人の影」に移

っていることによると考えられるのである。

万葉びとは、無意識のうちに様々なものを見ては驚き、感動していた。その感動は、「見る」対象が作者にとって特別な意味のない場合、生き生きしたものの美しいものの時には喜びとなり、衰えゆくものである時には悲しみとなっている。つまり「見えるところのもの」の状態にしたがって心が動かされているわけである。しかし、その景物が作者個人にとって特別な意味をもつものである場合には、もう「見えるところのもの」の状態そのものによっては心動かされないものである。この時万葉びとは「見えるところのもの」を見ているのではなく、その背後の「人の影」の方を見ているのである。そしてそちらに引かれて喜びや悲しみを抱いたということである。

四

最後に旅人の「吉野讃歌」について若干の考察を試みて本稿を終えることにする。

暮春之月幸ニ芳野離宮ニ時中納言大伴卿奉レ勅作歌一首并短歌

未遥ニ奏上ニ歌

み吉野の 吉野の宮は 山からし 貴くあらし 川からし さやけ
くあらし 天地と 長く久しく 万代に 変はらずあらむ 行幸の
宮 (3・三一五)

反歌

昔見し象きまの小川を今見ればいよよさやけくなりけるかも (三一)

六

長歌は、天皇の行幸の地「吉野」を讃めた、まことに詔に応えるにふさわしい響きをもった公的な歌である。ところが反歌はどうであろうか。一見、吉野象川のさやけさを詠んでいて讃歌らしい形はとっているのであるが、結句に「けり」が使われており、そこに個人的な響きが見られるのである。眼前の象川は昔旅人が見た象川である。その象川がいよいよ清らかになっていたことを発見した時の驚きが歌われているわけであるが、その時に旅人が抱いた感情はきわめて個人的なものであったと考えられるのである。今まで述べてきたことを考えあわせると、象川の背後に人の影が浮び上ってくる。象川はその昔、旅人に何か強烈な印象を与えたものであったことが分るのであるが、それにはある人物が絡んでいたのではなかったか、ということである。その人物が誰であったかはもとより知るすべもないのであるが、あるいはそれが天武天皇又は持統天皇であったとすれば、象川を見ることによって天武・持統朝の華やかなりし白鳳の時代を思い出したとも考えられる。とすればこの短歌は現時点の吉野を讃めたものではなく、過去をふりかえることによって現在の境遇を改めて認識した旅人の個人的な嘆きの歌ともとれるのである。この短歌について、大浜巖比古氏が、

「いよよさやかになりまされども、ああ」という旅人ひとりの嘆きの方が伝わってくる¹⁴

と述べられているが、私も同様に感ずるのである。この歌が「未だ奏上を経ぬ」ままに終ってしまったのも、こういった個人的な嘆きが歌われていたからだと考えると、納得がゆくのである。

註

- 1 土橋寛『「見る」ことのタマフリの意義』（『万葉』第39号所収）。
- 2 土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』二六五頁参照。
- 3 前出2同書、一六頁参照。
- 4 松尾捨治郎『万葉集語法研究・助動詞篇』、吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』等を参考にした。
- 5 渡瀬昌忠『島の宮上・中・下』（『文学』第39巻9・10・12号所収）、小野寛『草壁皇子舎人らの慟傷歌』（『万葉集を学ぶ』第二集所収）等に、舎人らの歌はいくつかの異なる場で詠まれたものであると述べられている。
- 6 吉井巖『舎人の嘆き』（『解釈と鑑賞』昭45・7所収）。
- 7 難波の宮で詠まれたとする窪田空穂『万葉集評釈』、北山茂夫『大伴家持』、恭仁京とする山本健吉『大伴家持』、青木生子『宮廷挽歌の終焉』（『文学』第43巻4号所収）や、皇子の供養の場で詠まれたとする伊藤博『十六卷本万葉集』（『沢瀉博士喜寿記念万葉学論叢』所収）等がある。
- 8 神堀忍『安積皇子挽歌』（『万葉集を学ぶ』第三集所収）参照。
- 9 皇子の人事上の喜びとする土屋文明『万葉集私注』、緒方惟章『天智系の皇子たち』（有精堂刊『万葉集講座』第五巻所収）、春の訪れを喜んだものとする金子武雄『天智天皇の諸皇子・諸皇女』（『万葉集大成・作家篇上』所収）、山崎馨『白鳳の季節歌』（『万葉集を学ぶ』第五集所収）、春の訪れと人事上の喜びとが重なったものとする大浜巖比古『志貴皇子』（有精堂刊『万葉集講座』第五巻所収）等がある。
- 10 前出2同書、第四章第一節2「国見の景物としての花、鳥、雲、煙など」参照。
- 11 拙稿『春日山黄葉にけらし我が心痛し』（『古典と民俗』第15号所収）において、紅葉は春の花や若枝のもつ呪的性質を有していることに言及した。紅葉も呪物であったと考えてよいであろう。
- 12 この歌の「しのへ」について、諸注釈書は「この花を見て私のことを偲んで下さい」ととっているが、小野寛氏が「大伴家持亡妾悲傷歌」（『万葉集を学ぶ』第三集所収）に述べられているように、「偲べ」とすると植えた時既に秋には死ぬことを予知していたことになり、そうは考えにくい

で、小野氏の説に従って「見てその美しさをめで楽しんでください」と解した。「しのへ」に「賞美する」意のあることは言うまでもない。

13 前出11拙稿参照。

14 大浜巖比古『歌人誕生——旅人覚書その一——』（『新万葉考』所収、二三七頁）。

本稿は昭和五十八年度萬葉学会全国大会において発表したものをまとめたものである。

原稿受理 一九八三年十二月五日